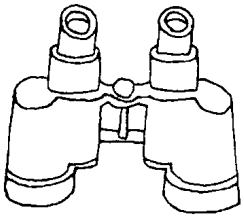
ソクラテス最期の弁明

青春推理小説

小峰元

ソクラテス最期の弁明



小峰元

講談社

著者略歴
本名、廣岡澄夫。大正10年3月神戸に生まれる。昭和16年大阪外国語学校(現、大阪外大)西語部卒。貿易商、教員等を経て、昭和18年毎日新聞社入社。現在、同社大阪本社編集委員。
「アルキメデスは手を汚さない」にて昭和48年度江戸川乱歩賞を受賞。
現住所
大阪府豊中市岡町北3—7—30
主要著書(講談社刊)
「アルキメデスは手を汚さない」
「ピタゴラス豆畑に死す」
「パスカルの鼻は長かった」

ソクラテス 最期(さいご)の弁明(べんめい)

第1刷発行 昭和50年3月24日
第7刷発行 昭和50年8月20日
著者 小峰 元(こみね・はじめ)
発行者 野間省一
発行所 株式会社 講談社
〒112 東京都文京区音羽2—12—21
電話 東京(03)945—1111(大代表)
振替 東京3930
印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株式会社若林製本工場
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 1975 HAZIME KOMINE
定価はカバーに表示してあります。 (文2)

Contents

prologue 5

WHAT do you know? 19

WHERE are you going? 54

WHO are you? 95

WHICH do you prefer? 123

WHEN did he lose it? 143

WHOM do you love? 182

WHY will you die? 216

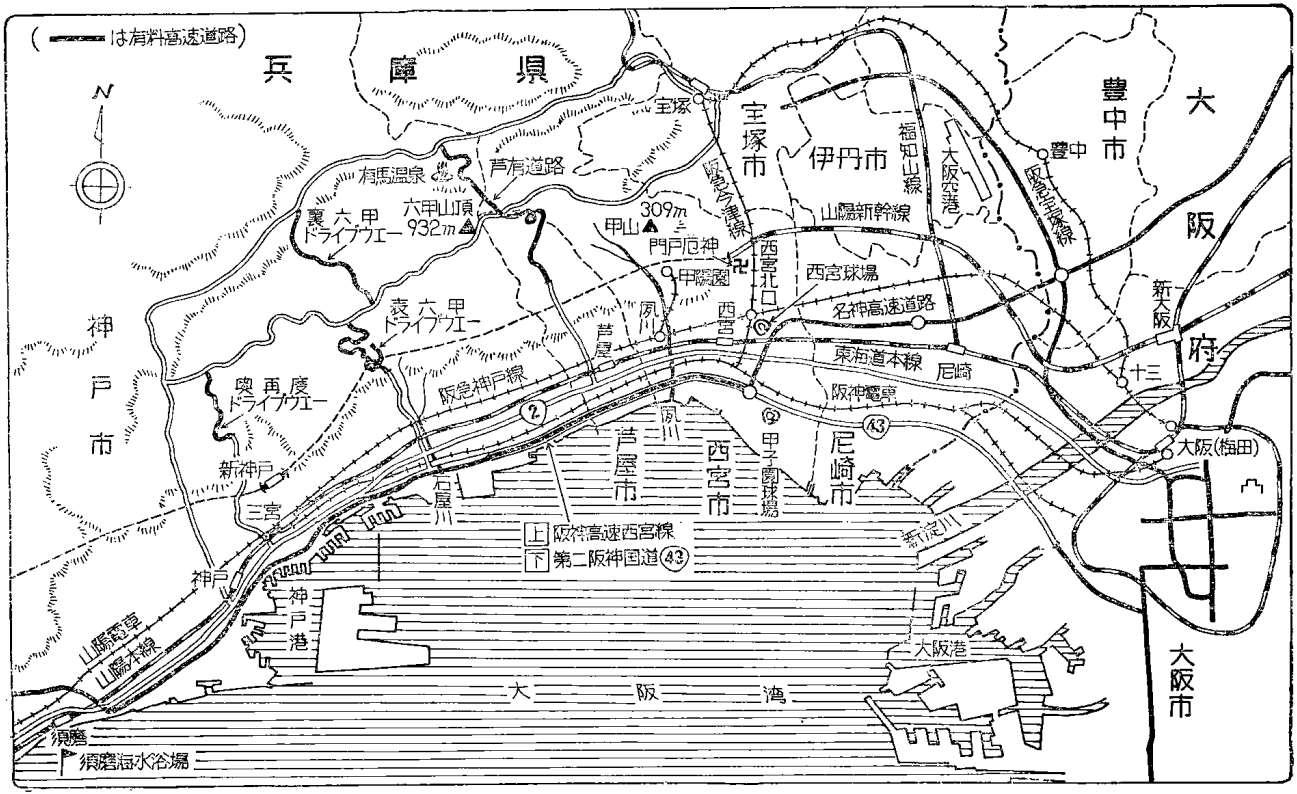
HOW did they kill him? 241

epilogue 268

装幀　和田　誠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ソクラテス　最期の弁明


(▬▬は有料高速道路)
兵庫県
N
宝塚
宝塚市
伊丹市
豊中市
大阪府
大阪市
福知山線
大阪空港
豊中
阪急宝塚線
阪急神戸線
山陽新幹線
有馬温泉
芦有道路
裏六甲ドライブウエー
六甲山頂
932m
309m
甲山
門戸厄神
甲陽園
西宮北口
西宮球場
名神高速道路
表六甲ドライブウエー
奥摂津ドライブウエー
芦屋
夙川
西宮
東海道本線
尼崎
阪急神戸線
阪神電車
新大阪
十三
大阪(梅田)
新神戸
三宮
石屋川
芦屋市
西宮市
甲子園球場
尼崎市
新淀川
上 阪神高速西宮線
下 第二阪神国道 43
神戸
神戸港
山陽電車
山陽本線
大阪港
大阪湾
須磨
須磨海水浴場
神戸市

prologue　7月21日（日）

双眼鏡が焦点を結ぶと、そこに乳房があった。
こんもりと白くて、うわ向きに尖った先端が朱鷺いろである。掌から溢れそうな量感だが、
「けれど、柔らかそうだ」
歯と舌の間に、生暖かくたまった唾液を、
「プルルン、プリン、とくるだろうな」
と咽喉を鳴らして飲み下ろしたとたん、乳房はレンズから消えて、青い波だけが残った。
「これは、したり」
と活劇画調で呟きながら、慌てて行方を追う。波の輝きが、目に痛い。
朝倉武史、阪神大学二回生。水泳部員の腕を買われて、神戸市の須磨海水浴場の事故監視員というバイトにありついた。日給四千円は、バイトとしては悪くなかったが、結構、多忙であった。それに炎天下の櫓の上で目を凝らすのは、思ったより重労働であった。目の下に青海原と裸女の群像がありながら、そして、そのなかの、これぞと思う裸像に水泳のコーチでコネをつければ、あるいはチャン

スも、と悔みながら、
「じっと我慢の……」
と双眼鏡で沖合いの監視をつづけるのは、苦行僧にも似た心境であった。
制限区域を突破して沖へ出るボートを監視するのも任務のうちである。沖へ出るボートには二種類あった。冒険気取りの高校生づれと、二人きりの領海を作りたがるアベック。どちらも朝倉のカンにさわる相手である。
カンにさわるから摘発に身がはいる。そして捕えたのが、そのボートであった。制限ラインを二百メートル以上も突破していた。
「こやつ、悪質犯」
と焦点を合わせて、ボート番号を読もうとしたとき、はからずも、そして幸運にも、あの乳房が飛び込んで来たのであった。
が、その乳房も、いまは見えない。
はて？　と双眼鏡を握る手に力がこもる。無理もない。つくづくと眺めたことも、しげしげと触れたこともない秘宝であった。二十歳と三か月の今日まで。
「この三か月が悩みの種さ」
と、その朝も、ボート番の、しょぼくれた老爺に言ったことであった。老爺とは、バイトの初日から、なんとなくウマの合った仲である。
「伊藤太郎てんだ。ほんの、ありあわせの名前さ」
左腕の、彫物を焼き消した痕を、さり気なく隠しながらの、そんな自己紹介ぶりが、朝倉には好もしかったからである。

「三か月が、どうしたね」
伊藤は、目を細めて問い返した。孫のグチを聞いてやろうという顔であった。
七月二十一日、日曜日、快晴。この夏最高の人出で、貸ボートは全部出払って、手持ち無沙汰な伊藤は、話相手のほしい時間でもあった。
「中学二年のときさ、友達に教えられて、初めて例の、めくるめく思いってやつを経験したんだ。コレが、アレの原型か、と悟ると、なんとか正式に、と思ったが、そのころは女の顔を見るのも眩しかった。高校では、かなり努力したつもりだったが、結局はヤラズの卒業さ」
顔の造作もそこそこだし、水泳をやっただけに脚の長さに自信もあったのに、と、フフンと自嘲の鼻を鳴らしたが、伊藤は応じない。おれは十五の春だったが、とそのときの興奮を反芻してはいたが、
「だらしがねえ」
とは、思っても、言わない。そうした男の面子を傷つける言葉を吐いてはならぬ、とは六十歳の知恵であった。
「大学の入学式の日、学長の訓示を聞きながら、おれは誓った。二十歳までには、どうあっても、と。それが……」
三か月過ぎても、まだとは、そりゃ切なかろうが、トンマな話さね、と伊藤は黙って彫ものの痕を撫でる。
だいたい近ごろの若いのは、と伊藤は口には出さず呟く。臆面もないくせに、口説き方に意気地がない、と咽喉の奥で笑う。海浜のボート番という場所柄から、何度も、そのときの科白を耳にしたが、十人のうち八人までが、

「ねえ、いいじゃんか、このとおり頼むからさ」
と、歯痒たらしい。なにもお願いする筋のものではなかろう。ぐずぐず言えば、張り飛ばして押えつけたらどうなんだ。それが男よ、と、
「いいかね。その気にならなくちゃ、やれないのが男で、女は、いやでもできる。そんな具合に作って下さったのは、神様のおぼしめしというものさ」
そこんとこを、よくよく考えて、
「しっかり、やりな」
どん、と背中に一発くらわせたのが、せめてもの励ましであった。
そのときの痛さを思い出しながら、朝倉は双眼鏡の視線を波間に這わせた。這わせながら、はてな、と再び首を捻った。海水浴場だから、裸はいい。だが、ナマの乳房は合点がいかぬ。肌色のビキニを見間違えたか、とも思ったが、
「でも、あのピンとはねた朱鷺いろは、肝臓にグキンと来たものな」
と思い直したとき、双眼鏡がボートを捕えた。が、人の姿はない。オールは引き上げられて、波に漂うにまかされている。
「ああいうのが事故を起こすのだ」
と事故監視員の意識に戻って、双眼鏡を握る手に力を込めたとき、ボートが大きく傾いた。
「やった！」
と朝倉は腹のなかで叫ぶ。慌てるな、姿勢を高くするな、と、思わず口に出す。と同時に、ボート上に、よろめきながら立ち上がる男の姿が見えた。まずい！　と思う間もなく、男は両手で虚空を叩きながら、頭から海中に消えた。反動で、ボートは反対側へ大きく傾いて、赤い腹を見せた。つぎの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瞬間、またも白い四肢が宙を舞った。
「乳房の女だ！」
朝倉は双眼鏡に痛いほど両眼を押しつけた。裸だ、全裸だ、と息を呑む。
「あん畜生！　少し潮水で頭を冷やすがいいや」
と毒づく。ボートで沖へ出て、波間のセックス。太陽をいっぱいに浴びてのそれが、今夏のヤングの流行と噂では聞いていたものの、
「お初にお目にかかったが、いい気なものさ。波の瀬の瀬に、揺られて揺れて、か」
救助隊へ連絡するのも、業腹であった。慌てるザマを見てやれ、と、女が浮き上がると見当をつけたあたりへ双眼鏡の焦点を合わせて待った。
水を叩きながら、細い腕が現われた。ボートから十メートルばかり離れている。
「ボートにしがみついて待っていな。腕が痺れて、沈みかけたころに、助けに行ってやるからさ」
女の表情が、波のうねりに隠されて、観賞できないのが残念であった。
「おそらく……」
と、高校生のころ、教室で回覧されてきた極彩色の責め絵が頭にひらめいた。後ろ手に縛られ梁に吊り下げられた裸女が、唇から鮮血をしたたらせながら跪いていた。その切れ長の目の、怒り、訴え、悶え、そして諦めたあとの、恍惚とした潤いの表情を見たとき、
「おれ、最高に感じちゃったものな」
いまこそ、その実況を、と櫓の手摺から半身を乗り出したが、あいにくと波は高い。
男のほうは、捜す気も起こらなかった。いいことのあとは悪い。海水で腹がクチくなったころ、脚から引きずり上げて、吊り下げてやる、と悪態を吐いているうちに、おや、と唇を引き締めた。女の

白い腕が、そのまま海に消えたからであった。白い泡だけが残った。
「いけねえ。あいつ、泳げないんだ」
慌てて呼笛を吹いた。
救助用モーターボートのエンジンが、けたたましく始動した。バイト学生が、我れ先にと馳せ集まった。監視員としての義務感からだけではないのは、
「溺れたのは、女か、男か」
と口ぐちに尋ねることで、彼らの魂胆は知れた。知るもんか、と吐き捨てて、朝倉は櫓を滑り降りると、救助艇に飛び乗った。
十分後、まず、男が引き揚げられた。全裸の少年であった。頬を叩いたが、目を閉じたままである。胸に耳を押し当てた。不規則な鼓動が、かすかに聞こえる。ろっ骨の下と横隔膜の間に掌を当てたが反応はない。
「呼吸は止まっているが」
と朝倉は、勿体らしく首をひねって、
「なんとか、やってみるか」
手荒く少年の両脚を摑むと、逆に吊して激しく揺さぶった。膝がしらで少年の腹を、こづくように押すと、唇がぶざまにひきつって、わずかに水が流れ出た。
股間にへばりついた、水藻のような黒さが目障りだったが、さきほどまで躍動していたであろうものが、あるかないかに縮かまっているのが、いい気味であった。ショックで一生そのままらしいぜ、と、意識を回復したら、まず、そう脅してやろう、とニンマリして、
「こいつ、どうやら死に損なったぜ」

横たえて、救助法のテキストどおり、唇を合わせた。息を強く吹き込むのが、最良の人工呼吸法であった。なろうことなら、女性のほうを担当したかったが、事故発生の通知を故意に遅らせた埋め合わせのつもりで、我慢することにした。

唇を密着させるには、身体を重ねなければならず、身体を重ねると、ずり落ちないためには両脚で相手の腰を挟み、肩に腕を回さなければならない。

「野郎同士が、しまらないスタイルになっちゃうな」

及び腰ながら、自然と抱きしめる形になった。首の細いやつだ、と思った。ふくよかな頬は、生気を失っていながらも、絽絹のように蒼く光って、濡れた髪が肌に染みいるように黒い。まるで少女だ、と、ふと錯覚しそうになって、吹き込む息に力がこもった。

潮に流されていた女が引き揚げられたのは、さらに半時間のあとであった。すでに生色はない。素人の手に負えぬ、と見て、救助艇は全速で浜へ戻った。

白砂青松という文字が、嘘でも誇張でもない須磨海岸の、その青松の木蔭の風とおしのいい一等場所に、臨時派出所が設けられていた。

「海水浴場へ制服制帽で詰めるとは、なんの因果で」

と不平と汗たらたらであった若い警官は、俄然、張り切った。朝から泣きわめく迷い子の世話ばかりで、いいかげん頭の血が煮えていたところへ、全裸の女が担ぎ込まれて来たのだから無理もない。

が、医師は冷静に首を振った。白髪の目立つ頭には、どうにも派手なチェックのバーミューダーの上から、ぽりぽりと尻を掻きながら、

「男は大丈夫。だが、女は……」

と片手で形ばかりの冥福を祈って、顔に白布をかけた。

海水浴場での水死の検屍は簡単である。死体は現場を動かさないのが原則であるから、たいていの場合は浜でヨシズ張りをして行政検屍が行われた。犠牲者が水を吐けば溺死。水を吐かなくとも、外傷や索溝などの顕著な所見がなければ、心臓マヒという判断で、詳しい死因追及は行われないのが普通であった。

この場合は、ことに問題がなかった。その瞬間を朝倉が目撃している。だから警官も、

「ガキの分際で、フローティング・セックスとは」

と、そこのところが、どうにもいまいましかったが、不注意からの事故死、という判断を変えるほどの要因ではない。

「こんな子供が」

と医師は全裸の二人を交互に眺めながら、眉をひそめた。

「女は三十近い。それも堅気じゃないな。その少年の親が、なんと言って嘆くか」

「なんの、なんの」

と警官は、こともなげに答えた。

「うちの子に限って、そんな。みんな相手の女が悪いんです、と、親の科白は決まってますな」

「この不孝者めが！」

ぴしり、と少年の頬を、ひっぱたいた。それが適切な治療法であったのか、同時に、少年はかすかに呻いた。

救急車の警笛が近づいた。

「あの人は？　……」

薄い唇がわなないて、うわ言のように低い声が洩れた。

「しがみつかれて……いっしょに沈んでしまった。あの人は泳げないと知っていたけれど……でも、苦しくて、死にものぐるいになって振りはずしてしまったんだ……それで……」
「もういい。あまり話しちゃいかん」
脈搏を探りながら医師は静かに頷いた。
「気にすることはない。君だけのせいじゃないんだから」
諭すような声であった。
「脱衣場から取って来ました」
と朝倉が衣類包を手に駆け込んで、眩しそうに女の裸体から視線を逸らした。
警官が、二人の所持品を、まさぐって、
「桐原英之。ほほう、高校三年生か」
改めて少年に驚きと非難の目を送った。
「女は……なるほど、先生のお目は高い」
こっくりと頷いて、
「桑野寿瑛子。バー・桑の巣、という名刺を持っていますな」
朝倉が背伸びして、警官の肩越しに覗き込んだ。緑色の生徒手帳が、兵庫県西宮市立夙川高校のものであり、桑の巣の所在地が、大阪キタ新地であることを、素早く読み取ると、
「これは面白いことになるかも」
そんな目になって、救急車に担ぎ込まれる桐原を見送った。
なにしろ四十八年夏の記録では、一日の最高人出は十万余、そして事故の一日最高は三十六人という須磨海岸である。その処理だけでも、関係者は手いっぱいであった。

「この暑いのに、手間をかけるんじゃないぜ」

須磨浦署刑事課の黒木伍弘は、病室に足を踏み入れると、桐原の回復が案外と早そうなのを見て、いきなり怒鳴りつけた。交通事故や海水浴場での溺死は、交通課や警邏課に任せときゃいい、つまるところは本人の不注意じゃないか。まして情事がからむ偶発事故だ。デカのでる幕か、と向かっ腹であった。が、二人のうち一人だけ死んだとなると、

「一応、事情を聞いておけ」

という指示に従わないわけにもいかず、八十二キロの身体を汗みずくにして病院へ駆けつけたのだから、

「それで、二人の関係は？　女は、君のなにに当たるんだ」

と口調が尖るのも、もっともであった。

「僕……知らないんです」

声が細いのは、体力のせいばかりでないのは、青白い頬に羞恥の色が赤く走ったことから知れた。だから黒木は口調を柔らげない。

「知らん？」

掌で顔いっぱいに浮いた汗を拭いとると、その手を水を切るように振った。ハンカチを使うと一日に十枚は濡らしてしまう汗っかきである。だから掌で代用したほうが安上がりさ、というのが彼の言い分であった。

「知らんでは……」

どっかと桐原の足許に腰を下ろす。ベッドが軋んで、桐原の身体が弾んだ。

「話の筋が通らんぞ。へんに隠しだてをすると、ことが面倒になるぜ。死んだのだぜ、相手は」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com